令和2年度　北九州市立　鷹の巣幼稚園　学校・園　学校評価報告書（自己評価）

〈様式　1〉

| 学校教育目標 | 未来に向かって　自ら学び　心豊かで　たくましい　幼児の育成 |
|---|---|

《本年度の重点目標》

《重点目標1》【基本的な生活習慣の確立】 〇あいさつや食事、用便等基本的な生活習慣の確立や体力向上を図る。

《重点目標2》【保育の充実を図る】 〇『SDGsの視点を踏まえた教育』の展開　〇幼児の発達や学びの連続性・直接体験を重視した異年齢交流保育の推進

《重点目標3》【センター的機能の充実を図る】 〇幼児教育の重要性や幼児育成内容等の発信の工夫　〇特別支援教育の視点を踏まえた保育と支援体制づくりの工夫

**◆記入にあたっての留意事項**

- 〇　「北九州市子どもの未来をひらく教育プラン」の実現に向けた指導のポイント＜重点取組（施策）編＞に示している重点項目から各学校・園で重点においた取組について記載すること
- 〇　取組については、各学校の重点目標達成のための方策に応じて設定すること
- 〇　小・中学校においては、今年度選択したスクールプランの様式（新旧様式、または学校独自の様式）の「取組」を位置付けること
  旧様式：「学力向上に関する取組」「体力向上に関する取組」「『長欠・不登校対策』『業務改善』に関する取組」「その他学校 独自で設定した取組」を 必ず位置付けること
  新様式：「子どもの学びに関すること」「子どもの心の育ちに関すること」「子どもの体力に関すること」「『長欠・不登校対策』に関すること」「『業務改善』に関すること」
- 〇　評価の例　A…目標を十分に達成できた　B…目標をほぼ達成できた　C…あと少しで目標が達成できた　D…目標達成までいかなかった

| 取組 | 評価項目 | 評価項目についての重点的取組 | 評価 | 〇成果と◆次年度に向けた改善点 |
|---|---|---|---|---|
| 心の育ちに関する取組 | 〇　発達に応じた連続性を大切にした生活習慣指導<br>〇「鷹の巣スタンダード」を基に、指導したい生活習慣を週案に明記し、指導の工夫や援助を行う。<br>〇　いじめを生まない、友達のよさを認め合える温かい学級・園づくり<br>〇　自分の健康を意識して食事をするようになる食育の取組 | 〇　学級の実態に応じて、絵本や視覚教材・教具を活用し、着替えや持ち物の始末、手洗いなどに自分で取り組もうとする気持ちを育てる。〇　週末の週案検討会で、生活習慣について、3年間を見通した年限ごとの指導内容を意見交流し、指導資料の活用と見直しに取り組む。<br>〇　幼児一人一人について職員間で情報交流を密にし、幼児なりの頑張りやよさを全職員で認めていく。また、学級や全体の場で、幼児同士でも友達のよさを知らせていく。<br>〇　栽培活動や食育人権教材等を活用した保育を通して、食べることや健康の大切さを意識できるようにする。 | | 〇　全職員が、幼児一人一人を大切にしようとする気持ちをもち、保育を進めた。幼児の実態を的確に把握し、各年限の指導内容に沿った視覚教材・教具等を作成・活用しながら指導し、家庭とも連携して実践したことで、衣服の着脱や遊具の片付け、感染症防止などの習慣が着実に身に付いてきている。<br>〇　異年齢交流保育指導において、幼児の育ちの3年間を見通した指導内容を週案に記すことで全職員で共通理解でき、全体での指導に生かすことができた。週案検討会で意見を交流することで、より効果的な教材活用や支援方法につなげることもできた。<br>▲「生活習慣指導資料（鷹の巣スタンダード）」の内容見直しと、指導に有効な教材・教具の開発や整備、家庭との連携は今後も継続していく。<br>〇　幼児の頑張りやよさ等を職員で共有し、認め励ましていくことで、自己肯定感の高い幼児が育っている。また、そのことを保護者に伝えることで保護者も子育てに対して、前向きに捉えられるようになった。<br>〇　個人や異年齢グループの友達とで、季節に合った野菜を育てることで、収穫を喜び、家庭での調理や弁当等での食体験を通して、苦手な野菜が食べられるようになった幼児が増えた。また、就学に向けて、手づくり教材を活用し、学級全体で互いに励ましながら栄養や食べること、健康の大切さを考えたことで、意識して食べる幼児が増えた。<br>▲　生活習慣の定着や食育の大切さは、取組のよさや子どもの育ちを具体的に保護者に知らせることで、連携を深めながら取り組む必要がある。 |
| 日本一あいさつに関する取組 | 〇　全職員が進んで笑顔であいさつをすることで、幼児も保護者も気持ちよくあいさつを交わす。 | 〇　毎日、幼児や保護者と目を合わせ、心の通い合う気持ちのよいあいさつを交わす。<br>〇　あいさつをすることを通して、幼児や保護者との信頼関係を築き、安心して自ら表現する気持ちを育てていく。 | | 〇　毎朝登園する親子に、園門で語先後礼で園長が範をを示し、互いにあいさつを交わすことを継続したことで、幼児だけでなく、保護者も丁寧にお辞儀をして朝のあいさつを行うようになった。また、幼児は、毎日の繰返しの中で心を開き、言葉を交わす心地よさを感じてきた。あいさつや自己表現すること、人と関わることに積極的になる幼児が増え、楽しい園生活を送った。<br>▲　園での取組を家庭でも意識して取り組めるように工夫する。 |
| 学力・体力向上に関する取組 | 〇　異年齢交流保育を意識し、保育のねらいや内容、環境構成や援助を考え、週案検討会で共通理解して保育にあたる。<br>〇　オリパラ教育を生かし、体力向上を図る。<br>〇　専門家による指導をきっかけとした継続的な運動遊びの場を工夫する。 | 〇　異年齢交流保育を軸に、「SDGsの視点をふまえた教育」のねらいと内容を取り入れた週案を立て、意見を交流して保育を進める。<br>〇　学びの連続性や直接体験験ができるように、環境や援助に考えて週案を立て、実践する。また、日々の保育を振り返り、記録することで、次の保育に生かす。<br>〇「たかのすオリパラげんきっこタイム」を日々継続して取り入れ、広い園庭やテラス、遊戯室等で様々な運動遊びに繰り返し取り組み、体を十分に動かす。<br>〇　体操教室講師やサッカーコーチ等による運動体験教室での、発達に応じた運動遊びや遊具を使った運動指導をきっかけに、様々な運動遊びに継続的に取り組む。<br>〇「リズムジャンプ運動」を毎週2～3回朝の時間に取り組み、体力・認知能力向上等を図る。 | | 〇　これまでの保育内容を「SDGsの視点をふまえた教育」につなげ、計画・実践・振返りを継続することで、保育内容が充実し、保護者も幼児の育ちを実感し理解も得た。<br>〇　異年齢交流保育を意識した保育内容を週案検討会で交流することで、学びの連続性を意識した保育を進めるようになった。また、幼児の育ちの姿と指導や援助との関連、有効な言葉かけ等について、全職員で共通理解し、効果的に指導に生かしたことで、幼児同士の学び合いが増えた。教師同士の横のつながりや協力体制の強化されている 。<br>▲　異年齢交流保育での幼児の育ちを「修了までに育てたい10の姿」とつなげて保育を進められるように、指導計画に明記していく。<br>〇　オリ・パラ教育推進事業の取組は4年目となり、どの幼児も日々、園庭で鬼ごっこをしたり、固定遊具やボール等を使って全身を動かし、生き生きと遊び、体力向上を図ることができた。また、異年齢交流保育の中で、遊びを通して幼児同士の関わりが深まったり、互いの運動遊びへの刺激や意欲へのつながりとなったりした。<br>〇　講師の指導内容を日々の保育や遊びに取り入れることで、発達に応じたバランスのとれた心身の発達につなげることができた。<br>〇　昨年から取り入れた新しい運動遊び「リズムジャンプ運動」では、幼児のリズム感を引き出し、体力向上や認知能力向上を図っている。運動能力も確実に、高まっている。<br>〇　どの幼児も体を動かして遊ぶ楽しさを実感し、進んで遊ぼうとする意欲や達成感、自信が育ってきた。<br>▲　各年限の発達に応じた運動遊びや遊び方を教材研究し、様々な運動遊びを通して何がどのように育っていくかを継続的にみていく。どの職員も、運動遊びの指導ができるように教材研究する。 |
| 家庭との連携に関する取組 | 〇　保護者に教育活動の取組と成果を知らせ、連携への意識を高める。 | 〇　保育参観や親子行事、運動会、生活発表会、園からのたより等で、取組や成果を保護者に知らせ、幼児が意欲や達成感をもてるようにする。 | | 〇　コロナ対策を行っての、保育参観や親子行事等を進めてきたが、幼児の活動の様子を直接見ることで、日々の幼児の頑張りや幼児同士の関わりのよさを知り、保護者から幼児への励ましへとつながったり、園教育の重点的な取組への理解を進めたりすることができた。<br>▲　園だよりや日々の保護者との情報交流を生かして、さらに、教育活動への理解を深め、家庭との連携により、健やかな幼児の育成を進めていく。 |
| 子育て支援の充実に関する取組 | 〇　保育相談の充実<br>〇　未就園児の会の充実と子育て相談実施 | 〇　毎日保護者による幼児の送り迎え時を有効活用し、職員から声をかけ子育て相談に積極的に取り組む。<br>〇　未就園児の会をひと月に1～2回実施し、幼稚園を体験したり、安心できる環境で親子でゆったりと遊んでもらう。 | | 〇　登園時は主に園長と、降園時は担任等と、保護者が気軽に話せる雰囲気をつくり、子育てで困っていることや尋ねたいことなどに応じてきたことで、保護者の不安感が減ったり、子育てへの気持ちが高まったりすることができている。<br>▲　幼児の成長や課題について、保護者と園とでよく理解し合って、効果的に子育てを進められるよう取組を継続する。<br>〇　地域に住む未就園児の親子が、笑顔で幼稚園に遊びに来て、幼稚園の環境の中で様々な遊びを楽しんだり、子どもの育成に関わる講師の話をきいたり、園職員と子育てについて交流した入りして、子育て支援に寄与することができている。 |
| 幼児教育発信の工夫についての取組 | 〇　園おたよりでの、教育活動発信（毎月）<br>〇学校運営協議会の実施（年3回）<br>〇　ホームページ更新（2か月に1回） | 〇　園だよりや学級だよりを通して、教育活動を発信し、保護者の理解を進める。<br>〇　学校運営協議会を年3回実施し、園経営の基本方針や園教育活動、保護者アンケート結果等から、ご意見を伺い、園教育活動を充実させていく。<br>〇　ホームページにて、教育活動のねらいや内容、幼児の育ちの様子等を発信することで、保護者や地域等の理解を進める。 | | 〇　毎月、園だよりや学級だよりで、教育活動のねらいや内容、幼児の生き生きとした様子を伝えたり、毎日降園時の連絡の中で、幼児の活動エピソードを伝えたりすることで、教育活動への理解を図ることができている。<br>▲　幼児の活動の様子や保育のねらいや内容、重点的に取り組んでいることなどについての理解を深めていくために、もっと分かりやすい方法を工夫していく。<br>〇　今年度の学校運営協議会は紙面での実施となったので、個別にお会いしたり、電話や手紙等でご意見をうかがったりして、園教育活動へ生かすようにすることとなった。<br>▲　ホームページを活用しての情報発信では、園経営や特色ある教育内容等について、分かりやすくする工夫、魅力ある内容や表現の工夫に努める。 |
| 特別支援教育推進に関する取組 | 〇　ケース会議で、適切な支援の在り方について共通理解を図りながら実践する。<br>〇　関係機関との連携を図り、適切な支援を行う。<br>〇　幼児の特性や実態に応じた支援や教材の活用、環境の工夫 | 〇　支援を要する幼児への理解を深めるために、適宜ケース会議を行い、情報交流して保育に生かす。<br>〇　療育センターや引野ひまわり学園、八幡特別支援学校と連携をとり、実態に応じた有効な支援や手だてを共有し、保育に生かす。<br>〇　活動に集中できない・気持ちの切替えがうまくできない、などの特性に応じて、視覚教材やタイムタイマー、困っているときの教師への伝達方法、丁寧な指示などの環境や支援の工夫を進める。 | | 〇　毎週末の保育の打合せ時やケース会議にて、幼児の生活や遊びの様子、課題等を情報交流し、より効果的な支援や手だてを話し合い、指導に生かすことができた。<br>〇　コロナ禍で、関係機関との連携が思うように進められなかったが、近くの八幡特別支援学校のセンター的機能を活用させていただき、幼児の正しい実態把握や、有効な支援・手立て等について指導・助言いただくことができた。その内容を全職員で共通理解して、支援を進めることができた。<br>〇　幼児の特性に応じた支援方法や視覚的な教材活用、言葉かけなどを保育に生かすことで、幼児なりに、どうすればよいかを学んだり、頑張ろうとする気持ちが表れたりして、成長へとつながることができた。保護者とも情報交流して連携を図り、幼児への関わり方を共通理解して一緒に取り組んだり、専門機関を紹介して、子どもへの見方や関わり方の改善を図ったりした。進学先の小学校とも連携をとり、育ちに応じた支援をつないでいく。<br>▲　幼児実態把握や保護者の幼児理解や連携を慎重に進め、家庭での取組につなげでいく。<br>▲　園にある支援教材について教材研究し、幼児の実態や課題に応じた効果的な活用を進める。 |
| 保育所と小学校との連携に関する取組 | 〇　萩原小学校校区での保幼小連携を進める。<br>〇　穴生保育所と年間を通して交流する。 | 〇　互いに互恵性のある教育活動になるように年間計画を立て、実施していく。<br>〇　地域に住む同年代の保育所の友達と交流活動をすることで、互いによい刺激とし、親しみをもったり、育ち合ったりして、豊かな交流活動にする。 | | 〇　今年度は、例年行っていた保幼小交流活動はできなかったが、就学前に、小学校1年生との手紙での交流をお願いした。年長児の「小学校への質問」に、手紙で一人一人に答えてくれ、もうすぐ小学校へ入学する幼児にとって、安心と期待の気持ちをもつことにつながった。1年生にとっても、よい学習になったと感想をいただいた。<br>▲　穴生保育所との交流は実施できなかったが、交流活動は、幼児の成長にとって大切な教育活動であるため、可能な内容・方法を考えていくことが必要である。 |